特集・コロナショック 危機時のリーダーはいかに行動すべきか？

財界

ZAIKAI
a Japanese business biweekly

保険ショップ向け会社から
"デジタル保険"への第一歩
日本生命が新子会社
はなさく生命に注力する理由

令和2年4月22日発行（隔週水曜日）令和2年4月8日発売　昭和28年10月3日第三種郵便物認可　第68巻第9号

2020 4/22

コロナショックなど「想定外」が起きる今——
環境激変の中で持続性ある経営とは
三井不動産社長・菰田正信の「アズ・ア・サービスの精神で需要創造を！」

本誌主幹 村田 博文

◎インタビュー
元防衛大臣
拓殖大学総長
森本 敏

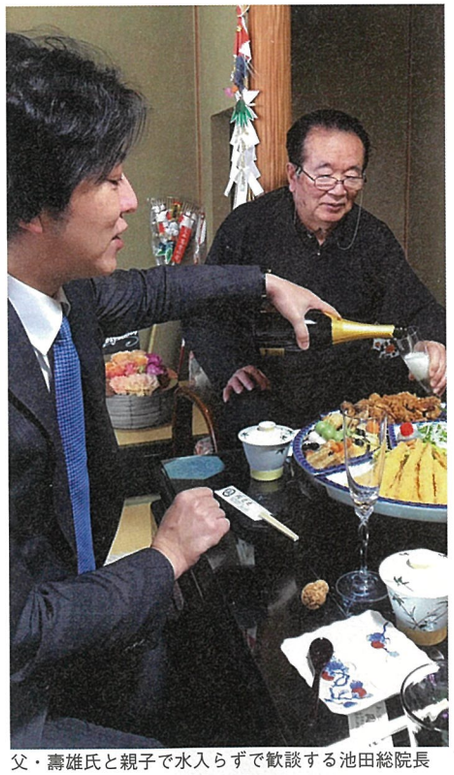
全国銀行協会会長
三菱UFJ銀行頭取
三毛 兼承

表紙の人
三井不動産社長
菰田 正信
撮影 齊田 勤

父・池田壽雄は何事にも一生懸命の人でした

東京皮膚科・形成外科　総院長　池田 欣生

池田総院長の父で医療法人邦寿会いけだクリニック理事長だった池田壽雄氏が今年1月、81歳で亡くなった。池田総院長に、医者の先輩でもある父・壽雄氏の人生と思い出を語ってもらった。



父・壽雄氏と親子で水入らずで歓談する池田総院長

父が心血を注いだ「池田式脳血管障害鑑別表」

――壽雄さんの経歴を教えてください。

池田　父は1938年、佐賀県伊万里市で生まれました。外科医だった祖父は、父が高校2年の時に亡くなり、それまで池田家にはたくさんの人が出入りしていたのに、貧乏になった途端、寄り付かなくなったのだそうです。人は良い時は寄ってくるけれど、そうでない時は寄ってこない、世の中はこんなものかと思った父は、世間を見返そうと必死に勉強し、九州大学医学部に現役で合格しました。当時、県立伊万里高校から九州大学医学部に現役で入るのは珍しいことだったそうです。

63年に卒業した後は九州大学付属病院第二内科や大和中央病院を経て、73年に大阪府和泉市で開業しました。九州大学付属病院第二内科では、福岡市に隣接した久山町の住民を対象に脳卒中や心血管疾患などの疫学調査がなされた「久山町研究」に参加しました。

――68年、「池田式脳血管障害鑑別表」という論文を発表しました。どういう論文ですか？

池田　まだCTがなかった時代、脳卒中を診断するのはとても難しいことで、多くの経験を持つ名医の診断を必要としていました。統計学が得意だった父は、そんな脳卒中の名医を1人1人回って、その経験と診断方法を教えてもらい、その診断基準を当時、東京大学にしかなかったコンピューターに入れて、年齢や臨床症状を表に書き込むだけでどんな医師でも簡単に名医と同じ精度の脳卒中の診断ができるようにしたのです。

わたしが大阪医科大学で講義を受けていた23歳の時、内科の講師がこの「池田式脳血管障害鑑別表」の論文を突然、父の論文は「ノーベル賞」をあげなければならないと評価しました。わたしは恥ずかしくて、「それは父が書いた論文です」とは名乗り出られなかったのですが、父にこの話をしたら、とても喜んだことを覚えています。

ギター、ピアノ、盆栽、ゴルフが趣味

――家庭ではどんなお父様でしたか。

池田　趣味の多い人でした。ギターやピアノをいつも上手に弾いていました。盆栽やゴルフも好きでした。しかし、70歳を越えると手が思うように動かなくなってきて、上手に演奏することができなくなりました。歩きにくくもなり、花を育てたり、ゴルフに行ったりすることもできなくなりました。

そのため70歳ぐらいで代替わりをしましたが、仕事をやめてしまうとボケてしまったらいけないと思ったので、週3～4日はいけだクリニックで外来に出ていました。しかし、79歳の時に脳の中の細い血管が詰まってしまう微小脳梗塞が見つかり、翌年、80歳で引退しました。引退したら急に老け込んでしまい、歩けなくなり、脳梗塞で倒れました。医師は自分が研究していた疾患で死ぬというジンクスがありますが、その通りになりました。

父が倒れた時、父は母に「救急車を呼ぶな」と言ったそうです。母からわたしに電話が来て、救急車を呼ばないわけにはいかないので呼びましたが、結局、右手しか動かない、寝たきりの状態になりました。「救急車を呼ぶな」と言った時、もう自分の体はもとには戻らないということが分かっていた父は、きっとこのまま「死にたい」と思ったのだと思います。なのに、身体が動かない、言葉もしゃべれない状態で生かすことになってしまいました。救急車を呼ばなければ、あのまま父は家の中で死ねたのを、わたしは無理やり生かし続けたのかもしれません。それが良かったのかなと今でも思っています。

――最後の1年間は、介護施設にいらっしゃったのですね。

池田　二つの介護施設にお世話になりました。二番目の介護施設ではスタッフが父をリスペクトしながら看てくれる環境だったので、父は満足しているようでした。でも、やはり動けないことに対するストレスがたまったのでしょう。胃潰瘍の出血から肺炎になり、亡くなりました。

――葬儀では池田総院長が喪主を務めました。

いけだ・よしお

大阪医科大学卒業。1996年大阪医科大学附属病院形成外科入局。同大学附属病院形成外科病棟医長、東海大学病院形成外科・美容外科臨床助手を経て、2000年大阪いけだクリニック開院。04年銀座いけだクリニック開院。現在は東京皮膚科・形成外科総院長の他、東海大学病院形成外科非常勤講師、一般社団法人・JAAS日本アンチエイジング外科学会理事長をつとめる。

池田　たくさんの方がいらしてくださいました。お花の数は、ホールの歴代の最高記録の5倍を越したそうです。

喪主を務めることになって、父について勉強してみると、改めて「池田式脳血管障害鑑別表」はすごい研究だったと思いました。大学生の時にはギターにはまって、プロを差し置いて九州でクラシックギターのコンクールの2位になったということも初めて知りました。

外科医は手術のために爪を短く切っておかなければいけないのですが、ギターを弾くには爪を伸ばさないといけませんから、そのためわざわざ内科医を選んだということも知りました。葬儀では、父が大好きだったギターの名曲「アルハンブラの思い出」をバイオリンで演奏してもらいました。僕もこの曲をよく聞かされて育ったので、思い出がよみがえりました。

――お父様も喜ばれていたことでしょう。

池田　くり返しますが、父は70歳の時にギターもピアノも弾くのをやめてしまったのは、その理由はだんだん手が動かなくなって、みんなの前でうまく弾けなくなったからだという話を、亡くなった後に母から聞きました。プライドが高い人だったのです。わたしは父の晩年の10年間、そんなことがあったとは全く知らなかったので、大変驚きました。

65歳ぐらいで引退する外科の先生などから、「おまえの年には僕ももっと手が動いていたんだよ」と言われることがあります。わたしも自分の腕が落ちたなと思いながら手術をしたくはありませんから、やっぱり65歳ぐらいになったら引退しなければいけないなと、これまでは思っていました。でも、実際は手術ができないだけでなく、趣味もできなくなるのです。みなさん、なんとなく、老後は趣味に生きようと思っているでしょう。ところが、手がついてこないのです。この事実に気づいたのは衝撃的でした。

高齢者の老化を克服できる医療をつくりたい

――では、老後を健康になるためには。

池田　父の死で分かったことは、70歳以上の人が医師になにか問題を訴えても、診察している医師は若く、現役世代なわけですから、親身になってはくれないということです。「手がうまく動きません」と言っても、「その年なら仕方ないですね」と取り合ってくれません。実際、倒れる前の父は歩くのもやっとの状態でしたが、医師は高齢だから仕方がないと放置していました。その医師たちも、自分が70歳になった時に気づくのです。

わたしはせっかく早い時期に父が気づかせてくれたのですから、今のうちに、自分が70歳を過ぎた時に起こってくるであろう、さまざまな問題を克服できる医療をつくりたいと考えるようになりました。単に長生きをするだけではなく、健康的で楽しく過ごせることが大切なのです。若い時と同じく頭が良く、若い時と同じく手先は器用でなければいけません。健康寿命を伸ばそうとよく言いますが、老後を楽しむためにはたくさんの能力が必要なのだということを、父の人生を通じて教わった気がします。

――具体的にはどんなことをしたいですか。

池田　介護施設は多くありますが、父のように右手しか動かなかったり、物を飲み込めない状態になったりしなければ入ることはできません。だから、その状態になる前の予防医学をいかに充実させるかが大事だと思います。そこで、海外からある機械を買ってきました。強力な磁力を筋肉にあてると、発電が起こって神経の中に電気が流れ、筋肉が鍛えられる「テスラフォーマー」という機械です。

今、このテスラフォーマーをギタリストやピアニストの人たちにボランティアで体験してもらっています。どんなに素晴らしいギタリストやピアニストでも、みなさん、60歳ぐらいになると衰えを感じているそうなのです。スロベニア製なので、これを日本人向けの機械にしようと頑張っているところです。これまでは老化だから当たり前とか、仕方ないことだととらえられていた現象をなおしたい。70代の人が楽しく現役で生きられる世の中を作りたい。このように本気で考えるようになったのは父のおかげです。

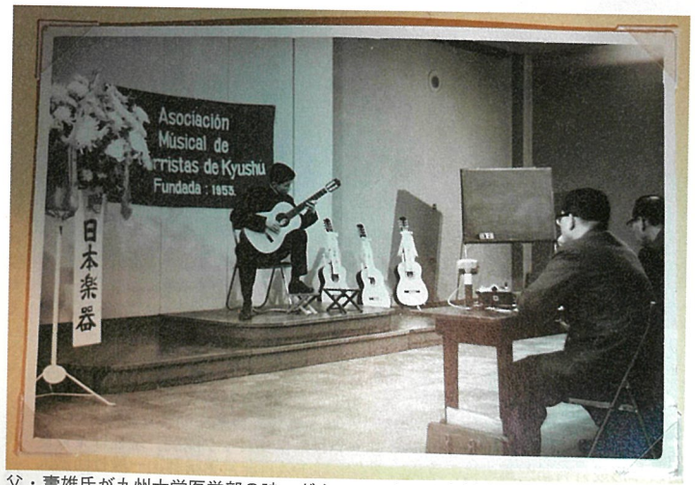
――池田総院長の座右の銘「陰徳（いんとく）を積（つ）む」はお父様から教わったものですね。

池田　「陰徳」とは「人に知られず、ひそかにする良い行い」のことです。見返りを求めず、人に知られないでする点がポイントです。例えば、トイレが汚れていたら、こっそりトイレ掃除をするとか。「トイレ掃除をしたよ」と言ってはいけません。祖父も、まだ国民皆保険制度がなかった時代、お金のない患者からはお金を取らなかったそうですが、こっそり、そうしていたそうです。

これまでわたしが抱いていた父親像は、祖父が死んだ後、苦労して医者になり、生きてきた人というものでした。若い頃、父はよくわたしのことを自慢したので、それもいやでした。でも、父が亡くなってから、父が6年前に伊万里高校の同窓会のブログで書いた文章を見つけました。「息子自慢」というタイトルでした。祖父は生前、息子が6人いたのに1人も医師になっていなかったので、知人の医師が息子の自慢をするのが辛く、父には「絶対に息子の自慢はするな」と「遺言」していたそうです。父はブログの中で、「遺言を守って、これまで息子についてなるべく黙っていた。でも、世の中は変わった。SNSの時代になった」と前置きをした上で、わたしのインタビュー記事を長々と紹介していました。そして、こう書いていました。「父・故池田謙次は陰徳を積んだ人であった。息子の座右の銘に『陰徳を積む』とあるのが嬉しい」

もっと自慢させてあげればよかった、もっと喜ばせたかったな、そう思っています。

いけだクリニックをリタイアの時、母・邦子さんと、スタッフに囲まれ花束を贈られた父・壽雄氏



父・壽雄氏が九州大学医学部の時、ギターコンクール九州地区で準優勝した

東京皮膚科・形成外科銀座院
〒104-0061　東京都中央区銀座2-11-8
ラウンドクロス銀座3F
TEL 03-3545-8000
HP http://www.251901.net/